



日本はSociety:0の社会に突入準備を始めた。「2025年問題」として団塊の世代が75歳になる2025年以降、急速に進む人口減少時代に加え一挙に社会から労働人口が減る日本社会に対してどう対策を立てなくてはならないか、議論されてきた。少子化の波は止まらず、人生百年時代と言われ溢れる高齢者でいびつな人口ピラミッドを構成する日本でできることは、健康寿命を延ばし自立の支援をすること、ロボットやAIで労働力を補填しながら労働者一人ひとりの生産性を上げること。北海道の人口減

## 医療情報システム協議会に参加して

情報広報部長 藤井 美穂

少は深刻であり、政令指定都市中最低の合計特殊出生率である札幌市でも、地方からの転入による人口増加は2020年を上限に減少に転じると推計されている。

令和元年度日本医師会医療情報システム協議会に参加してきた。狩猟社会(Society:1.0)、農耕社会(Society:2.0)、工業社会(Society:3.0)を経て、現在我々が住む社会はSociety:4.0とされる情報社会である。迎えin Society:5.0はどんな社会か? IoT (Internet of Things) で全ての人とモノがつながり、さまざま

識や情報が共有され、人が快適に活躍できる社会と説明される。ICTやAIくらいまでなら理解できるが、EHR (Electronic Health Record)、PHR (Personal Health Record) やNDB (National Database) など、3文字略語連発の講演で2日間の会議が終わり頭がかなり重くなった。

電車に乗ると、皆マスクをつけうつぶわいてスマホの画面を見ている。スマホの操作し過ぎで小指が変形するスマホ指や、画面との摩擦で指紋認証ができなくなるなどの新たな病態が生まれた。周りに寝てしまった小さな子供を抱っこする母親やヨロヨロしている高齢者には気が付いていない。いや、マスクをつけ画面に集中することで自分を

社会から隔絶した空間に置きたいという意志すら感じるが、これがSociety:4.0とかわれる日本社会の一場面でもある。

旭川市医師会の山下会長から「Society:0に向け、児童・生徒への教育、学校教育で学んでこなかった社会人に対しての教育をどのように考えているか?」とフロアから質問があった。中国をはじめとした各国のG5覇権戦略に遅れをとる日本の現状は、わが国の教育投資の減少と教育方針の誤りの結果であり、大学の研究者数の減少、論文数の減少を引き

起こしている。今年の大学入試も、直前で導入見送りになった「英語の民間試験」や「国語、数学の記述式問題導入と採点の民間委託」も、次世代の教育こそが国の力の根底であるにもかかわらずあまりに拙速な制度設計だったことが露呈した。

AIの医学界での運用は、病理組織や眼底検査の読読精度はそれぞれ99%、95%まで上がり、学会と連携した運用研究成果はごく近い時期、臨床に導入されたり前の手法となるだろう。患者の医療歴に関しても医師資格証と患者自身のマイナンバーカードの同時ログインにより医療ビッグデータを共有しICTと連結するのも実現するだろう。しかし、情報社会が構築できたことを前提に、先端技術を社会生活に取り入れ、「必要なモノ・サービスが必要な人に必要な時に必要なだけ提供する」ことにより社会の課題を解決することin Society:0の実現は、わが国の教育体制の下では極めて難しいと感じる。得た情報を自分自身の学びやコミュニケーションを通して国内や世界とつながり、自己実現に利用するSociety:4.0社会の次に来るのがSociety:5.0社会であろう。情報は駆使する人の能力といかに社会に反映させるかの哲学が必須である。今回、武漢のコロナウイルス感染をSARS感染防御と同じく対処すべきだとSNSで発信した中国の医師、さらにスクリーンショットで拡散した中国の多くの医師達と同じアクションを私達はできるか、科学者として教育されてきた私達の力が試される時代におかれていることを実感した。